

小型底びき網漁業の資源管理に関する研究

(複合的資源管理型漁業促進対策事業)

藤川裕司

1. 研究目的

小型底びき網漁業 1 種（以下小底 1 種）の魚捕り部の網目拡大を推進するために、平成 8 年度に開発した魚捕り部の簡易着脱方式による網目拡大¹⁻²⁾の普及を計った。さらに、魚類やイカ類の、底びき網網口への入網状況を水中ビデオカメラで撮影し、魚種により入網パターンに違いがあることが認められたのでこれについて報告する。なお、結果の詳細は「平成 10 年度複合的資源管理型漁業促進対策事業報告書」に報告した。

2. 研究方法と結果

(1) 魚捕りの簡易着脱方式による網目拡大の普及

小底 1 種の魚捕りの簡易着脱方式を普及させることにより、魚捕り部の目合を従来の 12 節から 9 節へ拡大することを計った。簡易着脱方式使用の希望者には、作製に必要な漁具を無償で配布すると伝えたところ、63 隻中 12 隻が希望した。ただし、実際に 9 節の魚捕りを使用したのは、この内の 7 隻であった。

本方式による網目拡大を試みた漁業者からの聞き取りより、実用上の問題は認められなかった。本方式による網目拡大の普及が進まない原因は、①簡易着脱漁具を作るのに労力を要する、②12 節と 9 節の魚捕りを交換するのが煩わしい、と漁業者が考えているためと推測された。

(2) トロール網網口における魚類入網状況の水中ビデオカメラによる撮影

魚類やイカ類の底曳網口への入網状況を水中ビデオカメラで撮影した。魚種により下記の 3 つの入網タイプが認められた。

- 網口の前方をしばらく逃避するように遊泳し、その後入網する（キダイ・クラカケトラギス）。
- 網口の前方をゆっくり遊泳しスムーズに入網する（シロイカ）。
- 潜砂あるいは海底に着底しているが、底曳網のグランドロープが接触すると、無眼側を海底に接触させた状態で、海底を這うように遊泳し始める。グランドロープ部へ向かって、遊泳した時に入網する（カレイ類）。

3. 文献

- 1) 藤川裕司・田中伸和・沖野晃：資源管理型漁業推進総合対策事業。平成 8 年度島根県水産試験場事業報告、46 - 50 (1998)。
- 2) 藤川裕司：小型底曳網の魚捕り簡易着脱方式による網目の拡大。日本海区水産試験研究連絡ニュース、384、4 - 5(1998)。